

体育授業における競争の指導

—第3学年「かけっこ」の実践を通して—

島 本 靖

1 基本的な考え方

体育授業は、文化としてのスポーツを素材としながら、何のために（目標）、何を（内容）、どのように教え・学ばせるのか（方法）との関係において構想される。したがって、近代スポーツが競争という様式を持つ以上、授業を構想する際に教師がそれを意図するか否かにかかわらず、実際の授業においては競争に関わる一定の教育作用をもつことになる。たとえば、児童の活動意欲を喚起する手段や方法として、競争を教材づくりの俎上に載せたとしても、そこで児童が内容としてどのように競争を学ぶかとの問題から避けられるものではない。競争は、その歴史的・文化的意味^{注1)}から、参加者が同じスタートラインに立ち、合意したルールのもとである一定の能力を競い合い、結果は序列化されるものと規定できる。そこでは、平等な人間としての権利を参加者が互いに認め合い、協同的な競争にしていくことが不可欠となる。

こうした問題を端緒として、第3学年「かけっこ」を教材に、競争を教え・学ぶ内容に指定した授業づくり^{注2)}を行った。児童の競争に関する見方・考え方に対して、教師が意図的・計画的に働きかけることを通して、その変容の可能性について検証してみた。

2 実践の概要

実践については、単元「かけっこ」を取り上げ、第3学年2組児童の男子20名、女子20名、計40名で行った。計画は当初全6時間であったが、第5時が雨天となったため、予定を1時間繰り下げ全7時間とした。毎時間授業後には、簡単なアンケートや反省カードへの記述を行わせ、学習についての楽しさや技術に関する知識の習得状況、競争に関する考えなどを把握するよう努めた。第1時と第7時には40m走の記録測定を行った。

単元を通して学習は、学級での生活班を基盤とした8つのグループ（1グループは男女混合の5名）を中心に行った。さまざまな競争は、4つの場を使ってグループ（2つのグループ）による1対1の対抗戦で行った。

(1) 指導目標

- ① 速く走るためには、重心を高くした走法が有効であることを理解し、それを意識して練習することができるようにする。
- ② 多様な競争形態を実際に経験しながら、よりよい競争について考えることができるようにする。
- ③ 友だちの意見を尊重したり、グループで役割分担したりしながら、協力して学習することができるようにする。

(2) 単元構成と指導内容（全7時間）

	学 習 活 動	指 導 内 容 と 手 だ て
1	オリエンテーション、事前アンケート ★学習の見通しを持つ。 ★50m走のタイムを計る。	★いろいろな競争を行いながら、合理的な走り方を学習していくことを知らせる。（診断的評価）

2	<p>相手がだれになるかわからない競争</p> <p>★速く走るためには、腰の位置を高く保ち、股を引き上げて走ることが大切であることに気づく。</p> <p>★グループ(各10名)ごとに自由にオーダーを組み、走る順番を決める。</p> <p>★2名ずつの対抗戦を行う。</p> <p>★競争について振り返り、問題点を考える。</p>	<p>★腰を高く保って走っている絵と腰が落ちている絵を比較させながら、速く走るためには、腰の位置、股の引き上げ姿勢や視線、腕の振り、ストライドなどが大切であることに気づかせる。</p> <p>★各グループのオーダーは、スタートまで他のグループに知らせない。</p> <p>★フリーオーダー制では、走力差の大きい組み合わせが出ることを取り上げ、解決策を考えさせる。(形成的評価)</p>
3	<p>同じくらいの走力の相手との競争</p> <p>★速く走るために大切なことを意識しながら練習をする。</p> <p>★各グループで走力順にオーダーを組み、走る順番を決める。</p> <p>★2名ずつの対抗戦を行う。</p> <p>★競争について振り返り、問題点を考える。</p>	<p>★グループの友だち同士で観察し合い、腰の位置や股の引き上げ、腕振りなどについてアドバイスし合うようにする。</p> <p>★走力順のオーダーでも全員が同じタイムの人とは走れないことを取り上げるその解決法として、「走力に合わせてスタート位置を変える競争」を取り入れさせるようにする。(形成的評価)</p>
4 5	<p>走力に合わせてスタート位置を変える競争</p> <p>★速く走るために大切なことを意識しながら技能習熟のための練習をする。</p> <p>★2名のタイム差によってスタート位置をずらして、対抗戦をする。</p> <p>★競争を振り返り、問題点を考える。</p>	<p>★グループの友だち同士で観察し合い、腰の位置や股の引き上げ、腕振りなどについてアドバイスし合うようにする。</p> <p>★遅い方の子どもを通常(50m)のスタート位置とする。</p> <p>★0.1秒につき0.5mの差をつけて、競争する。(形成的評価)</p>
6	<p>自分(のタイム)との競争</p> <p>★速く走るために大切なことを意識しながら技能習熟のための練習をする。</p> <p>★50m走のタイムを計る。</p> <p>★競争を振り返り、問題点を考える。</p>	<p>★グループの友だち同士で観察し合い、腰の位置や股の引き上げ、腕の振りなどをアドバイスし合うようにする。</p> <p>★オリエンテーションの時と同様に2人ずつで記録を測定する。(形成的評価)</p>
7	<p>学習のまとめ、事後アンケート</p> <p>★速く走るために大切なことを確認し合う。</p> <p>★楽しかった競争や心に残った競争、よりよい競争などについて考えを発表し合う。</p>	<p>★事後アンケートや感想文などの記述から児童の意欲や関心・態度をみる。</p> <p>★学習前後のタイムや速く走るために大切なことの記述を参考に各自の知識・技能の達成度を評価し、総括的評価のための資料とする。(総括的評価)</p>

指導計画では全6時間を予定していたが、第5時は雨天だったため、体育館で「走力に合わせてスタートを変える競争」のまとめを行った。第5時に行う予定であった「自分との競争」を第6時に繰り下げ、単元全体を7時間扱いとした。

3 結果と考察

(1) 技術の認識について

事前アンケートでは、「毎日走って体を鍛える」という回答が最も多く、ついで「手を大きく振る」「つま先でバランスをとって走る」が多かった。事後アンケートでは、「腰を高くする」「手を大きく振る」「足を高くあげる」「1歩を大きくする」など、具体的な技術に関する記述が多くみられるようになった。

これらのことから、今回の学習を通して「速く走るためには、重心を高くした走法が有効である」という内容が理解でき、技術に関する知識が習得できたといえる。

(2) 技術の習熟について

第1時と第7時における40m走の記録測定の平均は、男子が8.60秒から7.88秒、女子が8.98秒から8.22秒に短縮された。平均の記録差では、男子が0.72秒、女子が0.76秒といずれにも有意な伸びが認められた(0.1%水準)。

一般に体育授業では、走りのフォームに関する指導が系統的に行われていることは少なく、児童は生活の中で経験的に走りのフォームを獲得している場合が多い。こうした結果からも、走りのフォームの指導は、調整力の発達が著しい3年生の時期に行うことが有効であると考えられる。

(3) 競争に関する感じ方、考え方

本単元で行った4つの競争について、授業後にその楽しさや感じ方について回答を求めた。図1はその結果を比較したものである。「相手がだれになるのかわからない競争」「同じくらいの走力の相手との競争」「走力に合わせてスタート位置を変える競争①(第4時)」については、いずれも「楽しかった」と答えた児童が約90%、「楽しくなかった」と答えた児童が10%程度であった。

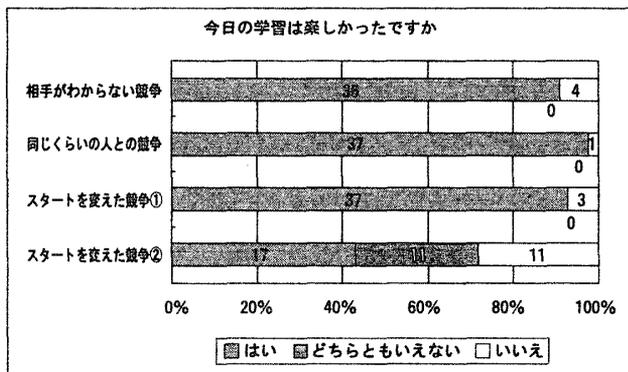


図1 それぞれの競争の楽しさ

同じくらいの走力の相手との競争」「同じくらいの走力の相手との競争」「走力に合わせてスタート位置を変える競争①(第4時)」については、いずれも「楽しかった」と答えた児童が約90%、「楽しくなかった」と答えた児童が10%程度であった。

「走力に合わせてスタート位置を変える競争①(第4時)」で楽しかったと答えた主な理由は、「速い人が後ろからスタートしたのでフィニッシュが同じ

くらいになった」「この競争なら相手が早くても遅くても大丈夫だから」「遅い人でも勝てるから」であり、楽しくなかった主な理由は、「後ろからスタートしたら負ける気になったから」「遅い人が勝ったから」であった。しかし、「走力に合わせてスタート位置を変える競争②(第5時)」では、「楽しかった」と答えた児童が約44%「どちらでもない」「楽しくなかった」と答えた児童がいずれも約28%であった。ここで「どちらでもない」と答えた主な理由は、「速い人と遅い人が競争できるのはよいが、前からスタートした人が『やっぱり自分は遅い』と思ってしまうから」「今まで勝っていた人が下がってスタートして負けるとやる気が出なくなるから」であり、「楽しくなかった」と答えた主な理由は「相手よりかなり前からスタートしたのに負けてしまったから。」「前からスタートした人を抜かして勝ったけれど、相手がかわいそうだったから。」などであった。

「走力に合わせてスタート位置を変える競争②」では、前時(「走力に合わせてスタート位置を変える競争①」)の感想をもとに、教師が「走力に合わせてスタート位置を変える競争はよい競争かどうか」についての発問を行い、「初めから差があったら後ろからスタートする人はやる気が出ない」「速い人が下がったら今度は速い人が勝てなくなる」「前からス

スタートして勝ってもあまりうれしくない。」「後ろからスタートして負けた人ががっかりしていた。」など、この競争がよくないと思う児童や前からのスタートで追いかけられる立場になった児童の気持ちに視点を当てた話し合いをした。教師の働きかけによって、「走力に合わせてスタート位置を変える競争」に対する子どもたちの考えがゆさぶられた結果、この競争の矛盾が児童に意識されたものと考えられる。

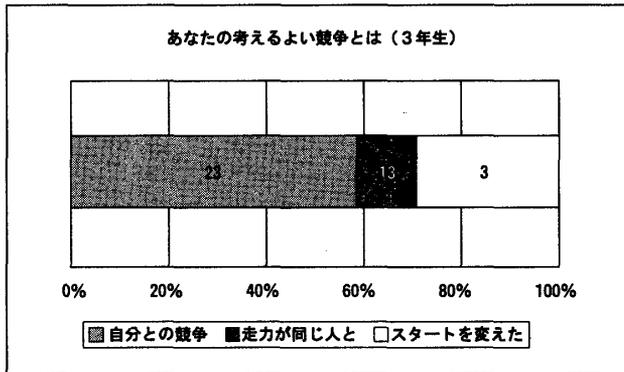


図2 自分で考えるよい競争

図2は、単元終了後に行った「あなたの考えるよい競争とはどのような競争か」というアンケートの結果である。この設問では、「自分との競争」と答えた児童が59% (23名)、「同じくらいの走力の相手との競争」が33% (13名)、「走力に合わせてスタート位置を変える競争」8% (3名)であった。実際に学習した4つの競争のうちの3つに収斂され、「相手がだれとなるのかわからない競争」と答えた児童はいなかった。

それぞれの競争を選んだ主な理由としては、「記録が伸びるし自信がつくから」「同じくらいの走力だと誰が勝つかわからないから」「速い人と遅い人がやってもフィニッシュが同じくらいになるから」などがあげられた。

図3は、競争に関する好嫌度を学習の前後で比較した結果である。事前アンケートでは「競争が好き」と答えた児童が、80% (32名)、「どちらでもない」と答えた児童が0% (0名)、「きらい」が20% (8名)であった。好きな理由は、「勝ったらうれしいから」「どっちが速いか比べられるから」、きらいな理由は「負けたらくやしいから」「勝ち負けがあるから」であった。事後アンケートでは「好き」が67% (26名)、「どちらでもない」が18% (7名)、「きらい」が15% (6名)となり、「どちらでもない」という回答が増加した。好きな理由は「自分との競争でタイムが伸びて競争が好きになった」「また勝つぞとか、もう少し速く走ろうという気になるから」「自分の力がわかるから」「同じくらいの記録の人と走るのが好きだから」どちらでもない理由は「タイムが同じくらいの人となら楽しいけれど相手が速い人と負けるから」「負けたらくやしいし、

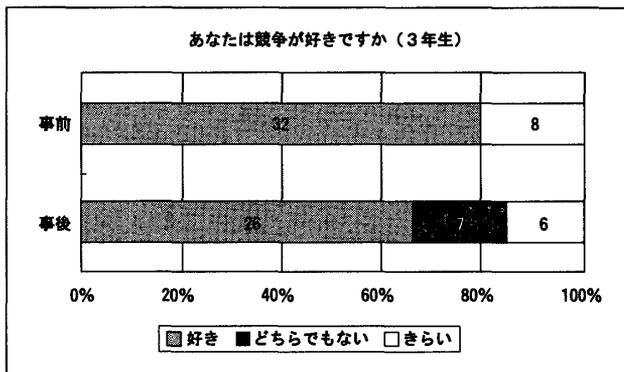


図3 事前、事後の競争に関する好嫌度

勝ったらうれしいから」「勝ったらうれしいけれど負けた相手がかわいそうだから。」、きらいな理由は「自分が負けても相手が負けてもいやだから」「追いかけられる人がいいとは思わないから」「相手が勝つと自慢するから」などであった。事前アンケートと比較して事後アンケートでは、「どちらでもない」という回答が増加していることに加え、「好きな理由」「きらいな理由」が事前アンケートよりも多様になった。

こうしたアンケートの結果は、いろいろな競争を体験し、児童が互いに意見をたたかわせながらそれぞれの競争のよい点や問題点を明らかにした結果、単純に「競争に勝つから好き」「負けるから嫌い」という二者択一的な発想ではなく、より多面的な視点から競争を把握し、人間的で協同的な競争を志向する児童が増えたものと考えられる。

4 まとめ

体育授業における競争の指導とは、競争に関する「わかり方」の矛盾を児童が課題として意識し、それを自主的に解決していく指導であるといえる。そして、その内的矛盾・分化とは主要には競争と協同の関係であり、児童が双方をどのように統一していくかを強く意識することが、学習の原動力になって働いた。多様な形態による競争を実際に経験し、児童がそれぞれの競争観を集団の中で互いにたたかわせることを通して、個々の競争に関する見方・考え方をより理性的なものに方向づけることができたといえる。それは、換言すれば児童が優勝劣敗、弱肉強食ともいえる野蛮な競争を否定し、人間的で協同的な競争を志向することと連動している。

3年生という発達段階を考えれば、児童の競争に関する見方・考え方は、極めて未分化といえる。したがって、児童の生活的・経験的な見方・考え方をゆさぶる、その内面に矛盾・対立を生起させるためには、教師の発問を媒介とした積極的な働きかけが必要となった。また、こうした事柄の見方・考え方への「ゆさぶり^{注3)}」は、知識・技能という文化的・科学的な内容の習得と不可分に行われる必要がある。

技能の習熟においては、事前と事後の40m走記録に大きな記録の向上が確認された。本来生活の中で経験的に習得される「走る」という技能を、調整力の著しく伸びる3年生の時期に取り上げることの妥当性を裏付けた結果と考えられる。特に、腰を高く保持して走ることに意識焦点を置いた指導は、有効であるといえる。

体育の授業づくりにおいては、競争と協同の関係を常に意識しながら指導しなければならない。競争と協同のどちらか一方に偏向するのではなく、両者の関係に着目しながら、弁証法的に統一することが重要である。今後も、授業における様々な矛盾を肯定的に捉え、それを顕在化させ、集団の力で克服していく授業づくりを目指していきたいと考える。

注及び引用・参考文献

注1) 競争概念とのいえる事柄については、中村の論に倣った。中村は、アダム・スミスの近代社会における自由競争の原理とヨハン・ホイジンガのプレイ論に依拠しながら、近代スポーツの競争概念について考察している。中村 渉、『体育科における「競争」の指導に関する研究』、広島大学学校教育学部修士論文、1999。参照。

注2) 競争を教え・学ぶ内容に確定した理論的、実践的研究の動向として、学校体育研究同志会の研究がある。たとえば、出原泰明は「みんながうまくなること」の感動、方法、社会的意味から「競争・勝敗（コンペティション）」を教科内容のひとつにあげている。出原泰明、「スポーツで何を教えるかー教科内容研究の今日的意味ー」、体育科教育第40巻14号、1992, pp. 14-18。参照。

注3) 教師による意図的な教授行為であり、「子どもたちの認識発展の原動力としての矛盾・対立をひき起こし、それを統一・止揚する契機となる働きかけ」「先入観や生活的概念（既知）と、法則や科学的概念（未知）とのあいだの葛藤を生じさせること」である。高田 清、「総論ー授業展開を構想する三つの側面」、吉本 均編、『現代授業大事典』、明治図書、1987, pp. 494-496。参照。

1) 小林一久、『体育の授業づくり論』、明治図書、1985。

2) 竹田清彦編、『体育科教育学の探究』、大修館書店、1997。

3) 吉本 均編、『現代授業大事典』、明治図書、1987。

4) 拙稿、「陸上運動の指導」、木原成一郎編、『初等体育科教育法』、共同出版、2001。

6) 森川・島本（共同研究）、「体育授業における競争の指導(2)」、『教育学研究紀要』、中国四国教育学会、2001。